

## は し が き

この研究報告は、当教育センターの科学教育課所員及び理科長期研修員の昭和62年度の研究成果の一部をまとめたものであります。

理科の学習では、自然の事物・現象を対象にした子供の直接経験がきわめて重要であります。それは自然というものが、社会的な事象と違って、こちらからはたらきかけることによって初めて反応を示してくれるからであります。また、子供は、本来自然の中で夢中になって遊び、物に触れ、行動しながら調べていくことを好むからであります。したがって、理科学習の成立には、子供が自然に接し、親しむ中で感覚を総動員させてはたらきかける活動が不可欠であります。

昨今は、子供の自然離れが問題となっております。テレビゲームに代表されるような人工的な物に夢中になり、生の自然から遠ざかっていく子供が増えているように思われます。みずみずしい感性の低下や暖かい思いやりの心の欠如などは、このことと無関係ではないと思います。人間と自然とのかかわりは豊かな人間性を育てるという面からきわめて重要であり、自然に感動する喜びを持たせる理科学習に寄せる期待はますます大きいと言えます。とりわけ、小学校での教育は、感性を育てる面で重要であります。しかし、見せたい自然、触れさせたい事象が、そこにあるからといってただ見せたり、触れさせたりしても小学生の感性が育つとは言えません。どうしても子供の発達段階に応じた指導のありかたが必要であります。つまり、子供と自然をいかにかかわらせるかが重要な指導のポイントとなります。

当教育センターでは、数年前からこれらの考えを踏まえ、子供と自然のかかわりを深める指導のあり方や身近な素材の教材化に取り組んできました。今年度も、以上の点に留意して研究を進め、その成果をまとめてみました。しかし、これらの報告の中には、引き続き研究を要する内容のものもあるかと思っておりますので、率直なご指導とご批判をお願いいたします。

最後に、これらの研究にあたり、ご助言をいただいたり、授業研究の機会を与えてくださったりしました各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和63年3月

新潟県立教育センター所長

長谷川 武 雄